

2 0 2 1 年 度
第 1 回
入 学 試 験 問 題
国 語

試験時間 50分

注 意

- 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開いて見てはいけません。
- 問題は□から□の14ページにわたって印刷してあります。足りないページや、印刷が不鮮明な箇所があった場合は、手をあげて監督者に申し出てください。
- 問題冊子と解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。
- 問題の内容に関する質問は受け付けません。
- 試験終了後、監督者の指示に従い問題冊子と解答用紙を提出してください。

校成学園女子高等学校

受験
番号

--

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

日露戦争が日本の勝利で終わった一九〇五年、ポーランドで生まれ、ロシアの首都モスクワで大学生活を送り、国事犯（国家の政治秩序を侵害する犯罪）の犯罪者としてサハリン（旧樺太）流刑に遭い、その地で民族学者となったプロニスワフ・ピウスツキは、刑期を終えてポーランド独立運動のために来日し、東京で長谷川辰之助という日本人と知り合う。

「ともかく」

プロニスワフは慌てて手を差し出した。

「しばらく、お世話になります。お名前を聞いても？」

男は「ああ」と帽子を取った。頭髪は新兵のように丸く刈り込まれている。

その青白い頬が、プロニスワフのある記憶を刺激した。彼を絶望から救ってくれたインディン少年も、ごく短い人生の晩年は同じ顔色をしていた。肺結核を患った者の特徴だ。

凝視していると、男も右手を差し出して来た。

「長谷川辰之助だ。以後、よろしく」

I のような明るい声で、男は名乗った。

長谷川は、不思議な人物だった。

日本人が明治維新と呼ぶ革命の前に存在した戦士階級の出身で、ロシアの帝国主義に強い警戒心と反感を持っていた。祖国を守りたいと士官学校を三度受験するが、近視のために入れなかった。しかたなく外語学校でロシア語を学び、しだいにロシア文学に惹かれるようになった。二十年近く前に上梓した小説は日本の文壇の脚光を浴びたが、

本人は自分の文学的素養に絶望した。二葉亭四迷なる長谷川の筆名は、

くたばってしまいたいという鬱屈した自嘲が由来らしい。たった一作で創作の筆を折り、以後は翻訳やら政治趣味やら外国語教員やら、書く気のない原稿料の前借りやらで身過ぎ世過ぎしてきたという。

意地悪く言えば長谷川は、ロシアの文学と政論に焦がれながら、異常なまでに内省的な自嘲癖からどちらにも近付けず、周囲をうろろうし続けるような人生を送っている。ただ妙に社交性があるようで、うろろうする過程で各界に広く知己を得ていた。

また日本はこのころ、母国を憂う人々の海外拠点の一つになっていた。主にはロシアと、そして中国の革命家が、極東の島国で暮らしている。

もと国事犯の革命家にして気鋭の民族学者という触れ込みのプロニスワフ・ピウスツキは、東京での日々を忙しく過ごした。長谷川に国籍を問わず様々な人物を紹介され、その伝手でさらに別の人に出会う。

長谷川は二日と置かず、プロニスワフが滞在する日本式のホテルにやって来た。とりとめのない話をして酒を酌み交わし、帰っていく。またプロニスワフが滞在費に事欠くようになると、銀座という繁華街の隅に下宿も世話してくれた。

「ロシアはいずれまた、日本と戦争を始める」

酔うたび、長谷川はそう言った。そんな余裕を帝国に持たせないようにロシアの革命家を支援しているのだという。

雪のない冬が過ぎ、ぼきぼき折れる枝に咲いていた梅なる花の香りが薄まったある日、長谷川は早朝からプロニスワフを連れ出した。

「今日は早稲田という所へ行く。その前にちょっと寄り道していこう」
二人は徒歩、市電、人力車を乗り継いでゆく。近代化の

る東京は次第に寂び、枯れた竹まいを帯びる。

木、土、それと紙でできた背の低い淡色の町並みが現れ、緑を基調にした田園にだんだん変わっていく。石造りの古都で育ち、壮麗な建築の並ぶ街で学んだブロニスワフの目には、まさに異世界だった。

遠くの地表に、薄桃色の雲がたなびいている。近づくと雲は、広げた枝いっばいに満開の小さな花をつけて並ぶ樹木に変わった。

「『サクラ』の花だ。この辺りは名所だね」

歩きながら長谷川が説明し、川岸に降りた。ブロニスワフも似たような花を知っている。ロシア語の語彙にあるはずの花の名に、長谷川はなぜか日本語を使った。

サクラの雲の下を、二人はさらに歩く。頭上を、いっばいに花をつけた太い枝が覆っていて、淡いピンク色の雲に包まれたように感じる。隙間から陽光と空の青色が見え隠れする。広い川の水面には水運か見物か、細く小さな舟がいくつか浮かんでいる。護岸の苔むした石垣が緑に光る。

川に沿って並んだ軽食や菓子を売る露店が、思い思いに開店の準備をしている。紙で作った小さな風車をいっばいに並べた店は、もう営業を始めている。

「ダンナ、ケッコウナオヒガラデ」

中年の店番が、険しく切り削った顔を人懐こく歪ませる。長谷川が「アア、ソウダネ」と応じて、中折れ帽を持ち上げようとしたとき、

Ⅱ の風が吹いた。

長谷川の手が空を掴む。舞い上がった帽子は、樹木から解き放たれて舞う花弁に霞む。からからと音を立てて風車が一斉に回る。ヒヤア、ウワア、などと見物客が楽しそうな悲鳴をあげる。マテツと慌てて長谷川

が帽子を追いかける。

舞う花弁は密度を増し、ブロニスワフの視界は薄桃色の霧に塞がれた。

初めて見る景色に、なぜか胸が締め付けられるような郷愁を感じ、^③ブロニスワフは戸惑った。

日本。かつて勇猛な戦士階級を擁し、近代戦でも中国やロシアと戦い抜いた^{※8}尚武の国。そのイメージを再び想起させるものは何もなかった。ただ淡い色彩の中で、人が穏やかに行き交っている。肌の色や使う言葉、骨の寸法を超えて、あまねく人類に共通の光景だ。

薄桃色の霧が晴れた。無事だったらしい中折れ帽を目深にかぶった長谷川が、目の前で小さな眼鏡を光らせている。

「どうだね、この景色は」

「美しい」

素直に、ブロニスワフは称賛した。

長谷川が川の方へ体を向けた。釣られて目をやった先では舞った花弁が次々と着水し、川面を染めながら流されている。

「先の戦争で、九万人近い日本の兵隊が死んだ。戦傷は十五万人を超える。彼らはきつと、かくも美しい景色や、そこに住まう人々を守るために戦ったのだろう」

およそ景色に似つかわしくないことを、長谷川は淡々という。風を失った花弁は、なお川へ降り続けている。

「ロシアも、同じくらいの人々が死ぬか傷付くかしただろう。だがね、戦場に斃れたロシアの兵隊たちは、日本のサクラを残らず切り倒し、川を全て埋めてしまおうなどと思っていたのだろうか」

僅かだが、長谷川の声は震えていた。

「私は日本人だ。戦勝は嬉しいし、忠勇なる我らが将兵に感謝と尊敬の念は尽きない。同時に、私は人間だ。冷たい荒野の地平線まで埋め尽くす敵味方の死体を思うと身が竦むし、その膨大な死によって生きながらえた自分が心底疎ましい」

「あなたが考えるべきことではない」

とつさに、プロニスワフは口を挟んだ。

「あなたが始めた戦争ではない。止める力があつたわけでもない。惨禍、あえてそう言うが、この惨禍についてあなたが負うべき責任は何もない」

④ 長谷川は、流される花卉をじつと見つめたままだった。

「かくせねば、日本は生き残れなかったのだろうか。両軍あわせて四十万くらいだろうか、それだけの戦死、戦傷を出さねばならなかったのか。では座して滅びるべきだったのか。それは断じてできない。とすると、^{※9} 結句、やはり四十万の戦死戦傷が、我が国の生存に必要なだったということになる」

背後、あの風車を並べた露店の方から、子供のはしゃぐ声が聞こえた。言葉はわからないが母親だろうか、婦人の声が混じる。中年の店番が優しく応対している。

「なあ、ピウスツキ氏」

長谷川が振り向いた。

「私たちが生きる世界は、かくも酷いものなのか。我ら日本人が参加しようと、その中に名誉ある席を占めようと憧れ続けてきた文明世界とは、こんなものだったのか」

⑤ プロニスワフは足元を見失ったような心細さを覚えた。

*作問の都合上、改変した箇所があります。

※1 インデイン少年……プロニスワフがサハリンで学校を開いたときの聡明な教え子。

※2 帝国主義……他国の犠牲において自国の利益や領土を拡大しようとする思想や政策。

※3 上梓……図書を出版すること。

※4 自嘲……自らを軽蔑し、あざけること。

※5 伝手……たより。てがかり。

※6 殷賑……にぎやかで、繁盛していること。

※7 中折れ帽……フェルト製で、頂の中央をくぼませてかぶる男性用の帽子。

※8 尚武……武道・軍事などを大切なものと考えること。

※9 結句……結局。

問一 空欄Ⅰ、Ⅱに当てはまる語句として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- I ア 燃えさかる真夏の太陽 イ きれいに塗られた壁
ウ 五月の鮮やかな新緑 エ 消える直前の蠟燭ろうそく
- II ア 一振り イ 一陣 ウ 一丁 エ 一筆

問二 二重傍線部 a 「身過ぎ世過ぎ」、b 「知己」の語句の意味として最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- a ア 人目を気にして生きること。
イ 自分の能力では及ばないこと。
ウ 世の中で生活していくこと。
- b ア 自分を知ってくれる人。
イ 自分で物事を考える人。
ウ 自分を支えてくれる人。

問三 傍線部①「お名前を聞いても」の後はどのような言葉が省略されていると考えられますか。自分で考えて十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「日本人が明治維新と呼ぶ革命の前に存在した戦士階級」とありますが、その「階級」の名を漢字二字で答えなさい。

問五 傍線部③「初めて見る景色に、なぜか胸が締め付けられるような郷愁を感じ」とありますが、「初めて見る景色」にプロニスワフが郷愁を感じたのはなぜですか。その理由を本文中の語句を用いて、四十五字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「長谷川は、流される花卉をじっと見つめたままだった」

とありますが、このときの長谷川の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日露戦争の勝利に貢献した忠勇な日本の将兵に感謝と尊敬の念を抱きつつも、その陰で犠牲になった名もないロシアの民間人に対する同情を禁じ得ないでいる。

イ 列強国であるロシアに勝利して意気上がる日本の国力に明るい展望を持ちつつも、この高揚感がいつまでも続くはずはないという不安に襲われてもいる。

ウ 日本が文明世界に着実に席を占めつつあることに手応えを感じつつも、実際には何の貢献もできない無力な自分に嫌気がさしている。

エ おびただしい数の犠牲者の上にしか成り立たない文明世界に恐怖と嫌悪を感じつつも、もはやそこにしか生きていく道はない日本と自分の運命を呪っている。

問七 傍線部⑤「ブロニスワフは足元を見失ったような心細さを覚え

た」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 苦悩する長谷川の言葉が、自分が歩んできた道やこれから進んでいく道にも当てはまるものだと感じ、長谷川の問いかけに対する答えを見いだせなかったから。

イ 長谷川に責任はないという擁護に耳も貸さず、一人苦悩の内にある長谷川の態度に失望し、日本での頼もしい友人を失ってしまったと感じているから。

ウ 美しいサクラの花とそれに親しむ日本人の人々に惹かれる自分の心の平安が、自己否定に走る長谷川の狂気にむしばまれていく気がしたから。

エ 翻訳や外国語を教えるなど多才で社交性に富んだ長谷川が高尚な苦悩に浸っているのに対して、滞在費にも事欠いて苦しんでいる自分の卑小さを思い知ったから。

問八 本文中の「サクラ」に関する表現についての説明として、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 四十八行目の「薄桃色の雲」や七十八行目の「薄桃色の霧」といった比喩表現によって、サクラの花の豊かき、柔らかき、はかなさといったものが効果的に表現されている。

イ 五十行目の「サクラ」というカタカナ表記によって、以降のカタカナ表記されている部分も日本語で語られているということが示されている。

ウ 五十二・五十三行目では、長谷川がわざわざ「サクラ」と日本語で言うことによって、ロシアにある花とは異なる、日本固有の文化、風土を象徴する花であると考えていることが表現されている。

エ 八十三・八十四行目では、流されていくサクラの花びらに戦争の犠牲となった多くの日本人兵士の姿が重ねられ、その潔さと尊さを長谷川が誇りに思っていることが示されている。

問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

見えない人にとって、社会は決して自分の体にフィットするようにはできていません。駅前には放置自転車だらけですし、画面はますますタッチパネルが増え、カードで買物物をすればサインを求められます。

この不自由さに対して、とりうる方法はいくつもあります。もつともストレートな方法は、行政に異議申し立てを起こしたり権利を求めて街頭でデモを起こすことでしょう。これらはいわゆる「市民運動」と呼ばれるものです。こうした活動は大切ですし、地道な努力が世論や行政にゆさぶりをかけた前例もたくさんあります。

でも、私がかかわった視覚障害者の中には、それとは別の戦略をとる人もいました。不自由な環境を物理的に変えようとするのではなく、^①その意味を変えることによつて、生き抜こうとするのです。

そこで使われる武器が「ユーモア」です。ユーモアたっぷりに不自由な状況を読み替えることによつて、社会に無理矢理自分を合わせなければならぬプレッシャーをかわしてしまふ。それはもしかすると個人的で、単なる強がりにつながるかもしれません。でも決してそんなことはない、と私は思っています。その理由については最後に述べましょう。まずは具体的に例を見てみます。

難波さんは、自宅によくスパゲティを食べるのでレトルトのソースをまとめ買っています。ソースにはミートソースやクリームソースなどいろいろな味がありますが、すべてのパックが同じ形状をしている。つまり一人暮らしの難波さんがパックの中身を知るには、基本的に開封してみるしかありません。ミートソースが食べたい気分ときに、クリームソースがあたってしまつたりする。

はたから考えれば、こうした状況は一〇〇パーセントネガティブなものです。でも難波さんは、これを単なるネガティブな状況とは受け取りません。食べたい味が出れば当たり前、そうでなければハズレ。見方を変えて、それを「くじ引き」や「運試し」のような状況として楽しむのです。「残念というのはあるけど、今日は何かなと思つて食べたほうが楽しいですよ。心の持つて行き方なのかな」「思い通りにならなくてもはダメだ」「コントロールしよう」という気持ちさえなければ、楽しめるんじゃないかな」。

(A) 難波さんは、見えないことに由来する自由度の減少を、ハプニングの増大としてポジティブに解釈しているのです。「情報」の欠如を、だからこそ生まれる「意味」によつてひっくり返しているのです。

難波さん以外の視覚障害者からも、似たような「ひっくり返し」を聞いたことがあります。たとえば「回転寿司は^{※1}ロシアンルーレットだ」という説。お寿司には香りがほとんどありません。見えない人は、目の前を通過する寿司が何のネタかを確認することができないのです。もちろん、お店の人に頼んで食べたいものを握ってもらうこともできます。

でも、その状況をあえてゲームとして楽しむこともある。まず皿をとつてみて、食べてみて、何のネタかを当てるのだそうです。同様の見方をあてはめれば、自動販売機もおみくじ装置と化します。何が出るか分からないままボタンを押してみる。手軽に「今日の運勢」を試せます。

最初にこうしたユーモアに触れたとき、^②私は本当に頭がくらくらするような衝撃を受けてしまいました。なぜなら、私が思い込んでいた障害者のイメージとあまりにもかけ離れていたからです。もちろん、すべての障害者がユーモラスというわけではないでしょうし、あるときはユーモラスな人が別のときにはそうでないこともあるでしょう。もしか

したら家にひきこもっていたい時間の方が長いかもしれない。そのことは承知のうえで、でも率直な感想として、そうしたユーモアが私の障害者に対するイメージを覆したのは事実でした。

まず、障害のある人の発言で笑う、という経験が新鮮でした。そのころはまだ、見えない人との関わりが浅い時期だったので、無意識のうちに自分が「ホスト役」の気分でした。ところが、見えない人が場を盛り上げ、自分がそれに乗っかるような形になった。その関係が新鮮でした。

もつとも、関わりが深くなるにつれて、視覚障害者で話し上手な人や話し好きな人が意外と多いことを知りました。ある人は、「ぼくたちにとつて表現のツールは限られている。だから言葉で相手の心をつかめるように努力している」と語っていました。

確かに笑いをとることに成功すると、少なくともその一瞬は確実に場を支配することができます。その快感は、見えない人にかぎらず、誰にとつても自信につながるものです。(B) 障害について話すときには、暗い話にならないように周囲に気を使ってくれている、という優しさもあつたかもしれません。

(C)、パスタソースの衝撃は、単に見えない人の話の巧さというだけでは説明がつきません。というのも、難波さんは笑いをとろうと思つて話をでっちあげたわけではないからです。「話のための話」ではない。日々の生活の中で出会ふ思い通りにならない状況や、どうにもならない現実を、難波さんは実際に「運試し」のようなものとして楽しんでいる。そのことを紹介してくれたまです。私たちはそこで、難波さんの「日常」を垣間見たにすぎません。

③「YAMAKASHI」という映画をご存知でしょうか。リュック・

ベッソンが脚本を書いた作品ですが、この映画には、「ヤマカシ」と呼

ばれる少年七人のグループが登場します。彼らは実在のグループで、ひとつで高層ビルをよじ登ったり、屋上から屋上へと飛び回っていく。もちろん危険が伴いますが、人工的な都会の町も、彼らの手にかかるジャングルのようなものに姿を変えます。

パスタソースや自動販売機で運試しする生き方は、あのヤマカシを思い起こさせます。物理的には同じ環境でありながら、それを全く別の方法で使いこなす痛快さ。

④そう、彼らのユーモアは、「痛快」なのです。困難な状況をポジティブに生きていることへの感心や敬意ももちろん感じます。けれども、それだけでは笑いは生まれません。やられた！ その手があつたか！ という感じ。その心地よさが笑いの原因でした。

均一なレトルトのパックや自動販売機のシステムは、言うまでもなく見える人が見える人のために設計したものです。率直に言って、見えない人を排除しています。福祉的な視点に立つなら、あるいは「情報」的な視点に立つなら、そうした排除は可能な限りなくしていくべきでしょう。パッケージに切り込みの印をつけるようメーカーに要望したり、自動販売機に音声案内をつけるように働きかけたりすることもひとつの方法です。実際に、そのような製品も出回っています。

けれども、難波さんがとつたのは全く別の方法です。健常者が、いわば「大まじめ」に中身どおりのソースをパスタにかけているかたわらで、難波さんはそれを遊びのツールとしてもとらえている。

いまだかつて、レトルトのパックで運試ししようと思つた健常者がいたでしょうか。大都市をジャングルとして生きるヤマカシのように、自分の体に合わないデザインやサービスをナナメから見つめる。そうする

ことで、彼らの方がむしろ遊んでいるのです。

健常者は、製品やサービスに埋め込まれた使い方におのずと従ってしまいます。そんなまじめなユーザーを尻目に、見えない人は決められた道をおかしていきます。「こっちの道もあるよ！」——何だか先を越されたような気分さえ感じます。

「こっちの道もあるよ！」と先を越されるのが痛快なのは、健常者の社会や価値観そのものが、障害者の使い道によって相対化されるからに他なりません。パスタソースや自動販売機の例は、笑いのジャンルとしては「自虐」に近いものです。ところが、自虐の攻撃対象がふつうはそれを口にする本人であるのに対し、この場合はなぜか言われた方もチクツとやられたような気分になる。だからこそ「痛」快なのです。

なぜ痛みがこちらに返ってくるのか。言うまでもなくそれは、笑いのネタに「障害」が関わっているからです。そして、それを聞いている私たちが、健常者だからです。

しかし、それは単なる痛みではありません。^⑤「痛」快は「痛」快でもあるわけで、何か「つかえ」がとれたような気分にもなる。痛すぎると笑えなくなってしまうですが、快さがあるかぎり、その笑いは建設的なものです。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』)

*作問の都合上、一部省略・改変した箇所があります。

※1 ロシアンルーレット：拳銃の回転式弾倉に一つだけ弾丸を入れ、弾倉を回してから、交互に自分の頭に向けて引き金を引くゲーム。

問一 本文の空欄（A）～（C）にあてはまる語をそれぞれ次

の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

- ア そのため イ しかし
ウ 加えて エ つまり

問二 二重傍線部 a 「垣間見た」、b 「福祉」の語句の意味として最も

適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- a ア 物事の一端をうかがった。
イ ある事柄の全体像を見た。
ウ 厳しい状況に気がついた。
- b ア 障害者に寄り添って行政が提供する支援。
イ 社会の構成員に等しくもたらされるべき幸福。
ウ 人間が人間らしく生きるための権利。

問三 傍線部①「その意味を変える」とありますが、これはどういうこ

とですか。以下の解答文の空欄にあてはまる最も適当な語句を、指定された字数で本文中から抜き出しなさい。

A (6字)

B (4字)

C (5字)

なものから D (5字) なものに変えるということ。

問四

傍線部②「私は本当に頭がくらくらするような衝撃を受けてしまいました」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 暗い話にならないように周囲に気配りをする視覚障害者に会ったことで、健常者よりも障害者のほうが人間的な優しさを持っていることに気づき、強い驚きを覚えたから。

イ 障害者との関わりが薄かったところに抱いていた障害者に対する否定的なイメージが覆され、障害者が人生を肯定的に生きていることへの感心や敬意で心が満たされたから。

ウ 視覚障害者が健常者の価値観を揺るがすようなユーモアによって日常生活を営んでいることに気づき、困難な状況を受動的に生きているという障害者像を覆されたから。

エ パスタソースや自動販売機で運試しをする視覚障害者と出会い、障害者にも個性と多様性があることを知って、従来の障害者に対するイメージを見直すべきだと思ったから。

問五 傍線部③「『YAMAKASHI』という映画」とありますが、筆

者がこの映画を紹介した理由として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ヤマカシ」達が危険を避けながら都会を懸命に生き抜くさまが、視覚障害者が運試しのように日々を冒険的に生きている姿と共通することを示すため。

イ 「ヤマカシ」達が自身をとりまく世界を一般の人々から見て思いもよらぬやり方で生き抜くさまが、視覚障害者のユーモアある生き方と共通することを示すため。

ウ 「ヤマカシ」達が人工的な都会をまるで密林のような自然な姿に変えるさまが、視覚障害者が不自由な環境を改善して生活するさまと共通することを示すため。

エ 「ヤマカシ」達が体ひとつで都会の建物を自由自在に飛び回るさまが、都市の物理的なバリアを乗り越えて生きる視覚障害者の姿と共通することを示すため。

問六 傍線部④「彼らのユーモアは、『痛快』なのです」とありますが、

その理由を明確に説明した部分を本文中から三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問七 傍線部⑤「『痛』快」は「痛『快』」でもある」とありますが、

これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 健常者にとって、視覚障害者が自身の障害を笑いの材料とするのに対して痛ましさが残るものの、障害者の前向きな生き方に触れることによって障害に対する偏見が薄れるということ。
- イ 健常者にとって、視覚障害者が自身の障害を笑いの材料としていくれることによって、障害者に対するわだかまりがなくなり、建設的な笑いがもたらす快さを感じるということ。
- ウ 健常者にとって、視覚障害者が自身の障害を笑いの材料とするのことによって、自虐的なユーモアだけでなく、健常者によって成り立つ社会や価値観への風刺を感じるということ。
- エ 健常者にとって、視覚障害者が自身の障害を笑いの材料としていくることに健常者へのかすかな批判を感じるだけでなく、新たなものの見方に気づかされた心地よさを感じるということ。

問八 本文の内容や表現の特徴に関する説明として最も適当なものを次

の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 障害者が生活しやすいバリアフリー社会の早急な実現を訴えるために、筆者は視覚障害を持つ当事者の発言を効果的に引用している。
- イ 具体的な事例が数多く提示されていることが本文の大きな特徴であり、筆者はその意味することの抽象的な考察は避けて読者の自由な解釈にゆだねている。
- ウ 全体を通して敬体で文章が書かれてあるなかに、わざと常体や体言止めを織り交ぜることによって、筆者独自の文章のリズムが生まれている。
- エ 感嘆符（！）で終止する文は全て視覚障害者の心の声を強調しており、読み手の印象にはっきり残るよう工夫されている。

【三】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

昔、^{※1}延喜の御門^{みかど}の御時、五条の天神のあたりに、大きな柿の木、実ならぬあり。^①その木のうへに、仏あらはれておはします。京中の人、こぞりて参りけり。馬、車も止めておけず、人もせきとめられず、^{馬、車も止めておけず 人もせきとめられず}拜み騒いでいる。あへず、拜みののしる。

かくする程に、五六日あるに、右大臣殿、^②心得ずおぼし給ひけるあひだ、「まことの仏の、^{※2}世の末に出で給ふべきにあらず。我

行きて、試みん」とおぼして、日の装束うるはしくして、^{※3}檳榔

の車に乗りて、御^{※4}後前^{しりぞき} おほく具して、集まりつどひたる物ども、

のけさせて、車かけ^Bはづして、^{踏み台を立てて}榻^{しち}をたてて、^Cこずゑを目もた

かず、あからめもせずして、まもりて、一時ばかりおはするに、此

の仏、しばしこそ、花も降らせ、光をもはなち給ひけれ、あまりに

あまりにまもられて、しわびて、大きな^{※5}くそとびの羽折れた

る、土に落ちて、まどひふためくを、子どもよりて、打ち殺してけ

り。大臣は、「^④さればこそ」とて、帰り給ひぬ。

さて、時の人、此の大臣をいみじく、かしこき人にておはしま

すとぞ、^{うわさした}ののしりける。

〔宇治拾遺物語〕

- ※1 延喜の御門の御時：醍醐天皇がお治めになっていた時代。
- ※2 世の末……………仏教が衰退した時代。末法の世。
- ※3 檳榔……………高貴な方が乗る車。
- ※4 後前……………付き人と先払い。
- ※5 くそとび……………鷹の一種。

問一 二重傍線部A「おほく」、B「はづして」、C「こずゑ」の読み方をそれぞれ現代かなづかいで答えなさい。

問二 傍線部①「その木」とありますが、どのような木ですか。十五字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「心得ずおぼし給ひけるあひだ」とありますが、そのように思った根拠を述べている一文を本文中から抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問四 傍線部③「我行きて、試みん」について、次の問いに答えなさい。

(1)「我」とは誰のことですか。本文中より三字で抜き出して答えなさい。

(2) 傍線部を現代語訳したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私がその木のもとに向かって、その仏が本物かどうかを確かめてみよう。

イ 私が馬や車を止めておけないほど混雑しているところに行つて、整理してみよう。

ウ 私が五条の天神あたりに行つて、勝手に集まっている人々が悪さをしないか監視しよう。

エ 私が大勢の見物人の前で柿の木に登つて花を降らせ、光を放つてみせよう。

問五 傍線部④「さればこそ」とありますが、どのようなことが思った通りだったのですか。三十字以内で説明しなさい。

問六 この文章の趣旨として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人をだますような人は、いつかは仏に罰を与えられるということ。

イ 理屈に合わないものを安易に信用せず、真実を追求すべきだということ。

ウ すぐに熱狂するような人々の中にも、真実を見極める人がいるということ。

エ 自分の目的のために他人を利用すれば、人々に悪いうわさをたてられるということ。

四

各傍線部の漢字は読みを答え、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 扇をあおぐ。
- ② 大地の恵み。
- ③ 甲乙付けがたい。
- ④ 森林を伐採する。
- ⑤ あまりのことに仰天した。
- ⑥ 運動会でカツヤクする。
- ⑦ 入学後の生活を思いエガク。
- ⑧ 映画のサツエイ。
- ⑨ シンライでできる人。
- ⑩ ブタイに立つ。